

チェック!

分娩舎・子豚舎を清潔に保ち 哺乳中・離乳後の下痢を防ぐ



今回のテーマは
豚の大腸菌症の
原因と対策
についてです。

●子豚の下痢の原因について

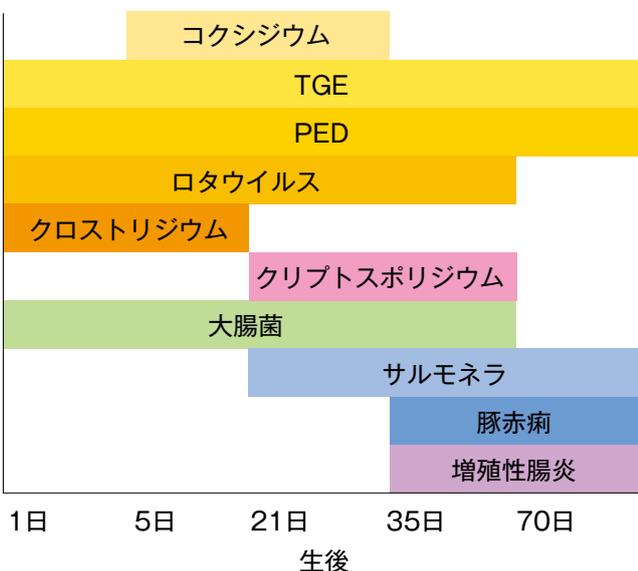
寒い冬も終わり、過ごしやすい季節となりましたが、皆さまの農場では、哺乳中、離乳後の子豚で下痢・軟便が目立ちませんか？

日本豚病研究会が平成14年に実施した養豚経営者へのアンケートでは、哺乳中、離乳後の死亡・淘汰の主な原因として下痢があげられており、養豚場における哺乳中、離乳後の下痢対策が重要な位置を占めていることがうかがえます。

下痢を引き起こす原因は哺乳中では母乳が十分量出していない、離乳後では餌の食べ過ぎ、腹冷えを起こしたなどさまざまなことがあげられますが、やはり、細菌やウイルスなどの病原体が腸管内で増殖することによって引き起こされる下痢も無視できません。

図に示しますように、哺乳中から離乳段階ではさまざまな病原体によって下痢が引き起こされることがわかっています。ジニアの検査室では、下痢が発生した場合、各種病原体について検査を実施し、効果的な対策の検討を行います。

図：豚の日齢と消化器感染症（下痢）



志賀 養豚の友2006年5月号を改変

●大腸菌による下痢

大腸菌によって引き起こされる子豚の下痢は、生後2週以内に発生する新生期下痢や離乳後に発生する離乳後下痢があげられ、近年では離乳後の大腸菌性腸管毒血症（浮腫病）の発生事例も報告されています。

新生期下痢や離乳後下痢を引き起こす大腸菌は、菌の中に下痢を引き起こす毒素（易熱性毒素：LT、耐熱性毒素：ST）を保有している割合が高いことが知られています。

（独）動物衛生研究所の報告では、1～5週齢の下痢便の約30%からLT、STなどの病原因子に関連する遺伝子を保有した大腸菌が分離されています（勝田ら、豚病研究会報、No.48、2006）。

また、ジニアの検査室でも下痢などから分離された大腸菌についてLTおよびSTの保有状況を調べたところ、下表のとおり両毒素の農場陽性率はそれぞれ約20%という結果が出ました。

表：下痢などから分離された大腸菌の毒素保有率（農場陽性率）

	LT (易熱性毒素)	ST (耐熱性毒素)
農場陽性率 (%)	20.9	18.8

クリニックセンター 2006年度集計データより

大腸菌による下痢対策として、環境面では子豚移動後の分娩舎、子豚舎の洗浄・消毒・乾燥の徹底などがあげられます。一方、飼養管理面では初乳の十分な給与、保温の徹底、腹冷え防止策の実施、有効な薬剤の使用、母豚への大腸菌ワクチン接種などがあげられます。さらに、下痢を引き起こした哺乳豚では、脱水対策として電解質の給与が不可欠です。

哺乳中や離乳後に下痢を起こすとその後の発育に影響が出ますので、下痢を見つけたら早めの対応で被害の拡大を防ぎましょう。